

理念に就いての歴史的と非歴史的

ロバート・シンチンゲル

學即「知識學」たると同時に學以上即「世界觀」たらむとすることは西洋哲學に特有な鬭争であらう。世界觀としては哲學は絶えず新なる始源を持ち且つ完成することが必要であり、又學としては歴史的豫想や、修得、展開並に無限の進歩を必要とする。基督教の形而上學が固化し、近代科學が擡頭し來つた時、此鬭争は最も鮮やかであつた。こゝに、當時の合理的體系の弱點と同時に、其偉大さが横はつてゐる。就中マールブランシュの體系は最も興味深い現象である。彼はプラトールの色彩を帯びた偉大な基督教思想家達の殿將となり、同時に近代式科學を近代心理學に依つて基礎付け、之を進歩發展せしめた、と云つてよからう。プラトール、アリストテレス、ガリライ、及デカルトと類縁を有して居るに拘らず、彼の所謂「新理念體系」は、デカルト學派、殊にヤンセニストたるアーノルドに依つて代表せられる一派に於て烈しい反對を見出した。十年以上も引續いた争論を此處で追求する必要はない。次に試みやうと思

ふ論究は、只マールブランシュの理念論の中、哲學の一般問題に關係ある要素を發展させやうと思ふのみである。

此目的の爲には、先づ第一にマールブランシュの説を簡單に叙述しなければならぬ。次に彼の説の中、一層一般的な興味を喚起し得る部分を細説し、最後に此小論文の第二部に於て、其結論を引出し、認識の一般目的と照合して、課題としての理念の問題に、全く一般的に包含せられて居る概念構成の特質に關して、聊か卑見を開陳したいと思ふ。

a

部分よりも全體に於て初めて物の真相が覗はれるとするならば、マールブランシュの哲學に於ては殊にさうである。彼の哲學は批判的勞作と云ふよりは、形而上的幻像と呼ぶ方が至當であらう。宗教的な人であつた彼に取つては、哲學は辨神論であつた。「惡の根源」や「恩寵」が、夫故に彼の興味を中心點に立つ。基督教思想の凡べてに於て見られるやうに、彼に取つても亦「神」は「完全な存在」であつた。あらゆる現實在

は只神を分享することに依つてのみ存在する。さりとて其現實在を神が必要として居るかのやうに、神の不完全に現實在性の根據を求めてはならない。其根據は只々神の滿ち溢るゝ愛にのみ基けらるべきである。神が創造の際に消費した愛が、すべての被造物の中に於て、再び其根源へ歸らんと喘ぐのである。かくてあらゆる實體は其存在、其努力、其運動を神の中に持つ。動かすと云つても如實に一つの變化の原因となる譯でない。何者、それは新創造を意味し従つて只神の力にのみ存するからである。我々が原因と呼ぶものは要するに只機會因に過ぎない。神は只之を機會として、自己自身の永劫の法則に縛られながら、其働を挿むのである。かうした仕方、神が、神的理性に根據を有する法則に自己を縛るといふこと、並に自然法の結果として此世に生起する凡べての惡を神が許容するといふことは——マールブランシュの言ふ所では——其完全性と矛盾するものではない。何者完全性の標識は、最も簡単な手段で最も偉大な複雑さを造り出すことだからである。此偉大さに比ぶれば、我々が惡と名けてゐるやうなものは取るに足らぬ卑小なものとして消えて了ふ。此簡単な法則とは創造主の持つ永劫不變な思想であつて、凡べての被造物の持つ思想と同じく、永遠の昔から、神の理性の中に安らふ。

扱て認識の理想とは、神が被造物を識る其仕方にに分享するにある。換言すれば神の理念を直観するにある。然るに靈魂は思想的實體として、無限にして完全な存在者と結び付く限りに於て存在するのであるから、それは神の理性と直接に結合する。夫故に靈魂は、認識する爲には、混沌たる現實在の動亂の中から退いて、自己自身に沈潜しなければならぬ。さすれば注意深き眼光に神の理念は啓示せられるであらう。靈魂の一つの變狀であるかの感覺は機會因に過ぎない。靈魂は之に依つて一對象の現前に注意させられ、理念の考察に向つて刺衝せられるけれども、認識は之に依つて與へられるものではない。マールブランシュの心理學は、要するに、彼の理念論の消極的保證と考へていゝであらう。

b

以上のマールブランシュの理念論に對して反駁を試みたのがアールノルドである。マールブランシュは彼の論争に依つて餘儀なく新しい基礎付けと明瞭な定義とに導かれて行つた。

兩者共に其出發點はデカルトの *cogito* である。只兩者の異なるは *cogitatio* の中に含まれた *perceptio* と *idea* との解釋に就いてある。マールブランシュに取つては *idea*

は思惟の對象を意味し、叡智的對象 (intelligibler Gegenstand) として思惟に對して物質的對象 (materieller Gegenstand) を代表し、perceptio は物質的對象の把握を意味する。

然るにアーノルドは之に反して、デカルトの此兩概念をば關係 (rapport) と解する。perceptio は主觀に對する、idea は客觀に對する、何れも關係と考へる。それであるからして、彼に取つては、眞實の對象とは、直接的な客觀であつて、それが只思惟作用に於ける客觀關係——cognatio に於ての idea——に依つて代表せられて居るに過ぎない。従つて、彼はマールブランシュの理念を不必要な假定と見る。

然るに正しく此代表と云ふ要素がマールブランシュをして理念を獨立な叡智的對象として基礎付けるやうに導いて行つたものであつた。と云ふのは若し思惟作用が無限なるものを代表するならば、夫自身も亦無限でなければならぬ、と彼の基礎付けは云ふのである。普遍性、必然性及超時間性の場合も之と同様である。凡べての之等のアプリオリの賓辭は、之に對應した保持者即理念を要求する。凡ての理念は、又無限性を其特性とするが故に、悉く無限でふ理念の中に包藏せられなければならぬ。此無限でふ理念は一被造物の原型と云ふやうなものではあり得ない。神が自己自身を直觀する理念に外ならぬ。これこそロゴスであり神の普遍理性で

あつて、あらゆる生成物の原型がこの中に含まれる。

かやうにしてマールブランシュは再び其論述の歩を形而上的根本觀念に進めたのであるが、それは中世のプラトニズムの範圍を出づるものではない。けれども此理念の形而上的基礎付けと並んで、マールブランシュが理念に到達するに至つた他の過程が明にされて居るのであつて、今やそれを個々に渡つて説かなければならない。

マールブランシュは、理念を睿智的實相として導き入れ得る根據をば、物質的のものが思惟の直接的對象となり得ないと云ふ事實に求め得ると思つてゐる。之は實體論的演繹とでも云ひ得やう。等しきものは只等しきものに依つてのみ認識され得ると云ふ原理に基く。此原理は實體論的主張を含む。何者、此原理の云ふ所は對象の存在に關係して居るからである。恰も公理のやうに、如上の命題はエンペドクレスの時代以來、哲學の歴史を通じて行はれて居る。近代の衣を着けては對象の意識内在と云ふ命題として現はれて居るものがそれである。此處では、マールブランシュの場合と同じ様に、思惟の對象となり得る可能性から、非睿智的存在の不可能が推論せられる。これは餘りに多くを推論するものであるが、此餘分こそ正しくかの

實體論的主張である。マールブランシュにあつては、それは intelligibel の二重の意義の中に隠されてゐる。denkbar と ontisch intelligibel の二義が即それで、従つて其推論は四辭過誤に陥つてゐる。意識内在の説にあつては Bewusstseinsinhalt なる言葉の中に隠されてゐる。こは一つの *μετάβασις ἐπὶ ἄλλο γένος* を意味する *οὐκ* 夫故にアーノルドはマールブランシュの思想に反對して「意識」とは純精神現象で、只主觀並に客觀への關係に依つてのみ規定され得るものと高調する。全く問題はゲーテの所謂 *Urphänomen* で、之を睿智的對象に限つたのでは何等理解を容易くするものでない。さりとて又空間化と云ふ危険を避けやうとして、意識を「關係」として規定する事に執すると、容易く又一つの他の *μετάβασις ἐπὶ ἄλλο γένος* に陥る。即關係と云ふ論理的規定を論理的關係と云ふ規定と入れ換へる危険に陥り易い。それは丁度論理的に規定される可能性から、他の論理的の存在或は妥當様式の不可能を推論すると相似た論法と云はなければならぬであらう。

かく云へば或は此場合意識一般が問題で現實的な意識を指して居るのではないと云つて反對するかも知れないが、其反對は「何物か」論理的に規定されたからと云つて、論理的な或物として規定されて居るのではない」と云ふ議論に對する反駁とは

ならない。問題が只本質規定に擴張される許りである。之は意味としては論理的であるが、さりとて何等か論理的のものを意味するものではない。此事に就いては後に再び論明する時があらう。此處では只かの相等しきものは相等しきものに依つてのみ認識され得ると云ふ命題が、管にマールブランシュに於てのみならず、全く一般に、純認識論的前提から實體論的結論を引出さん爲めの仲介として、好んで採用されるに至る事情を注意するに止めて置かう。けれども、益し眞實眞面目に、意識を以て哲學の根柢たらしめやうとならば、*cogitatio*の範圍内では對象の如何なる「存在」が其可能なる爲の豫想となるか否、*cogitatio*其者に果して如何なる存在規定が從屬するかに關して、全然何事も決定し得ないと知らねばならぬ。よしんば主觀客觀關係が論理的規定として確立されるにしても、それでは意識性 (*Bewusstheit*) の本質的要素が把握せられてゐない。しかも此要素の實存こそ意識の存在を作るものなのである。心理學も亦之に就いて何等言ふ所を知らない。意識は只與へらるゝが儘に取るべきであり、*Uphänomen*として明晰と判明に持ち來すべきである。之と同様にあらゆる「内容」は、それが與へらるゝ儘に、即我々が其中に住み、且つ考へつゝある世界として、實在的存在並に非實在の意味及只考へられるに過ぎない凡ての價值領域の

複合として受取るべきなのである。凡べて之等が私に意識せられると云ふこと、或は一般に可能的思惟の對象であると云ふこと——これは最初に於ては重要ではない關係と思はれる。かやうにして原始的に意識された現實在は、反省の中に見出された主觀への可能的關係は如何にもあれ、依然として存在する者であり現實在である。それは固より存在と現實在の限りなき多種多様の形式を現はすものである。且又それが多様な現實在關係に依つて、人間の現實的意識に——意識一般ではない——仲介せられる所に、個人的の *Perspective* となつて現はれる、しかも尙此 *Perspective* にあつて現實在として現はれるのである。

認識が向ふのは此現實在に對してである。意識一般の半徑は果して如何なる點迄達するかは、*Apriori* に規定する事は出來ない。若し出來得るとしたならばそれは夫自身不可能なものに依つてか但しは又全ゆる意識を絶對的に超越した——従つて考へ得られない——世界に依るより外はない。丁度それと同じ様に可能的な人間意識の範圍は、原理上原始的に意識された現實在から、全く關係なく絶縁されたものに依つてのみ規定され得る。それは併し結局其範圍は規定されないと云ふことと同じい。

d.

認識に於ては其關係が違ふ。前科學的従つて非科學的の經驗の範圍が科學的經驗の範圍と合致すると考へねばならぬ必然性はない。意識が論理的として従つて認識として規定せられることは、既に曾て排斥した所である。マールブランシュは意識と認識とを同一と考へやうとする誘惑に負けてゐる。彼に取つては「我々が形體的事物を夫自身に於て知ることが出来ない」と云ふことは明白であり従つて事物其物は直接の對象とはなり得ないとする。これは併し意識に對しては當て籍まらない。意識は只 *Wissen um etwas* に依つて規定せられるのであり、此直接的な *Wissen* は又間接的な知識即認識となつて現はれる。夫故に認識は直接的知識ではないと云つて居るマールブランシュの言葉は正しいとしなければならぬ。彼によれば自己自身に關する直接的知識は認識ではないのである。また認識は實に何物かを自己の中に取り入れ自己に合體せしめ、云はゞ嚙下する等のことを意味するのではない。また他のものの中に入り込み、自己を其中に融解することでもない。認識とは決して實體的同化を意味せず、實に概念に依る仲介 (*Vermittlung durch den Begriff*) を意味する。

夫故にマールブランシュに於ける理念は、對象に妥當する Logisch-Begriffliche を意味してゐたのである。それはまた彼に依つて事物の思想的規定として、感覺を機縁として認識され得るものと定義せられた。マールブランシュは感覺を通じて與へられる所謂第二性質を抽象せんとするのであるが、此抽象は危険である。何者、かくすれば原始的に意識された現實在が全然其統一を破壊せられ、回復の望なきのみならず、之に依つて理念を感覺に關係せしめる可能性が否定せられるであらう。感覺を混沌無秩序のものと考へることは、根本的的感覺論に反對して、論理的秩序概念の必然性を論證することを容易ならしめるではあらうが、其代りに、此概念を感覺に關係せしめることが困難、否殆んど不可能となるであらう。夫故にカントは感性の「形式」並に圖式論を其間に挿入するの止むなきに立ち至つたのである。此感覺を全然除斥するならば更に問題は容易くならう。Geist は今や全く自己の本性に歸るが、併し獨舞臺となる。自己自身を觀じ既に知る所を學び、既に永劫の昔より有し且つある所のものを創る。かやうな倦怠した、romantische Finale は、併しながらかのヘーゲルが云ふ様な *Die Kalt fortschreitende Notwendigkeit der Sache* といふこと。

概念をば獨立に考察し、其論理的機構を、其創造に追隨して理解せんとすることは、

確かに一つの特種な課題となるであらう。けれども只叡智的なものの内部に於てのみ行はれる此種の運動は現實在の凡べてではない。云はゞ現實在とは違つた Dimension に對角線的に動いて行くので、只其一斷面に過ぎない。假令んば概念的機構の形成に際して何等異分子に遭遇しないにしても、概念其者の中に既に他のものに對する、即それが妥當する現實在に對する、Intention 並に Deutung を包含するのである。夫故にマールブランシュも現實的事物は理念の中に認識されると云ふ。

以上マールブランシュの實體論的演繹に關する説明に依つて得られた消極的結論は、一般に意識關係からは叡智的存在規定は推論せられないと云ふことである。また積極的結論としては、丁度如上のことからして、意識内容が其示す所のもの及意味する所のものとして、即 reales Sein 及び irrealer Sinn として、よし主觀的の Perspektive に色々映するにしても、依然實體として確證され得るといふこと、従つては又認識が仲介として規定せられると云ふことである。(未完) (岡野留次郎譯)

(註) (一) Fr. Nicole Malebranche ① Recueil de toutes les réponses du Père Malebranche, Prêtre de Portotiere, à Monsieur Arnauld,

Docteur de Sorbonne, à Paris 1709 及び之に對應した Arnauld の著作即巴里で刊行された彼の全集の三十八、三十九、及四十卷

參照。拙著 Philosophische Grundfragen bei Malebranche und Arnauld, „Tee“, Hamburg 1921 に於て兩者の文通に含まれた認識論

的問題を論究した結果、余は一般「理念」問題に關する一層廣泛な思想に導かれて行つたのであつて、以下論述せんとするのは、只其輪廓に過ぎない。

(二) 既にアーノルドもマールブランシュに對して空間的關係との比較即「内容」とか「内部」とか「外部」と云ふが如き言葉は、直に思惟並びに意識の規定として用ゐてはならない、既に「持つ」と云ふ小さな言葉でも餘りに多くの意味し得ると述べてゐる。